

年末年始のチューリヒはバルトリで

年末年始恒例の演目には、通常チャイコフスキー《くるみ割り人形》やフンバード・ディンク《ヘンゼルとグレーテル》などが並ぶが、チューリヒ歌劇場ではチエチーリア・バルトリがニューイヤヤーの顔だ。昨年はヘンテル《アルチーナ》だったが、今年はまだ、観客に愛されているロッシーニ《チエネレントラ》に戻った。幸福感が劇場を包み、新年が始まった。

トーンハレ管とフィルハーモニア・チューリヒが急接近

そんな2020年、スイス音楽界の注目者は、以前は同じオーケストラだったチューリヒ・トーンハレ管弦楽団とフィルハーモニア・チューリヒ（歌劇場の専属オーケストラ）の急接近だ。前者の新音楽監督パオロ・ヤルヴィと、来シーズンからチューリヒ歌劇場音楽監督に就任するジャンドレ・ア・ノセダは、20年以上にわたって友情を培ってきたという。そのノセダが12月18日、トーンハレ・デビューを飾った。イタリア人が初登場する際に組まれるお家芸的プログラムは皆無で、ドヴォルジャーク《野鳩》とベルトラシ・シヤマユをソリストに迎えたラウエル《ピアノ協奏曲》、最後はR・シユトラウス《ツァラトゥストラはかく語りき》という自信にあふれた選曲で、トーンハレ管とはすでに息が合った演奏を聴かせた。

そして1月19日には、ノセダがチューリヒ歌劇場の第3回交響曲コンサートを指揮した。チケット売り場には残席に並ぶ行列ができており、聴衆の関心の高さを物語っ

ていた。プログラムも、トーンハレ管のときとは違った長所が引き出せるように工夫されていた。シユベルト《魔法の竖琴》序曲（「ロサムンデ」序曲）は、この小さな舞台ではオーバードラマティックで、スケールが大きなシユベルトになったが、チャイコフスキー《ロココ風の主題による変奏曲》では、また不自然な距離感を保っていたオーケストラも、「お手並み拝見」と見下ろす観客も、超越した次元に運ばれた。2011年のチャイコフスキーコンクールの覇者、ナレク・アフナジャリヤンのチエロの魔法にかかり、メンデルスゾーン《交響曲第3番《スコットランド》》も熱く演奏し切ったノセダは、音楽監督就任前に十分存在をアピールできたといえよう。

いっぽうヤルヴィのチャイコフスキー・ツィクルス第3弾は、1月8日から3日間続いた。「交響曲第2番」、「第5番」、その間にバルトーク《舞踊組曲》を挟んだのは、民謡的性格を持つという点で「第2番」と共通項があるからとのこと。ヤルヴィは「コース料理の間に挟まれるシャトーベットのような役割」をバルトークに期待しているという。実際、「第2番」で聴かれた純ロシア的な重いアクセントは、バルトークのハンガリー民謡ヘスムースに移行し、「第5番」も、十分に歌わせたフレーズの美しさに固執し憶懐を描くが、感傷的にはならない冷静さを保つ手法は同じだ。終盤、超速で達する頂点を持続させるヤルヴィのエネルギーは、聴き手のほうが息切れするほどだった。

ミュンヘンとフロレス

1月10日は「世界でいちばん大きい音楽

四重奏団」を名乗るCHARTSが、スイス人ソプラノのレグラ・ミュンヘマンを迎え、聖ペーター教会を沸かせた。その高い音楽性ゆえに、一流のソリストを獲得し、かつそれに甘んじず、高め合う共演が見ものだ。『妖精の歌』と銘打った今回のプログラムは、グリーク《ペール・ギユン》組曲の間にグリークの歌曲、マスネット《サンドリヨン》から妖精のアリア、ヴェルディ《ファルスタフ》からナンネットのアリア、オッフェンバック《ホフマン物語》のオリンピアのアリア、モーツァルト《魔笛》からバミーナのアリア、そしてグノー《ロメオとジュリエット》からジュリエットのアリアを散りばめ、完璧な技術と自然な声で可憐な妖精そのもののミュンヘマンと、大オーケストラでは出せない細やかな表情が光った。

1月21日、ルツェルンのKL（ルツェルン・カルチャー・コングレスセンター）で聴いたファン・デイエゴ・フロレスの「ヴェルディ万歳」は、彼の到達した頂点の一つだ。《リゴレット》からのアリアでは、まだヴェルディには時期尚早かと思われたが、《アッティラ》、《十字軍のロンバルディア人》、《二人のフォスカリ》と、ヴェルディ初期の作品で生きるベルカント唱法は完璧だ。ヴェルディの求める響きがいまだ不十分な彼の声でも、息の完璧なコントロールがヴェルディ・レガートを満たす。最後の《椿姫》

では、軽すぎる歌い回しに逃げながらも、豪華なヴェルディ・プログラムで聴衆を満腹にさせ、休憩中には最新CDが売り切れとなっていた。満足感から始まった後半は、レハールのオペレッタで笑いを取り、フランスものもヴェルテル《マスネ《ウェルテル》》とドン・ホセ《ビゼー《カルメン》》で聴かせ、そしてフッチーニ《ボエーム》で締めくくった。しかしエキサイティングな場面はここからだ。得意のギターを抱えて3曲弾き語りし、《グラナダ》、そして最後はフッチーニ《トゥーランドット》のアリアまで歌ってしまったのだ。これだけ歌っても疲れを見せない声帯は、確かな発声技術の証であり、最後まで情熱を注いで聴衆を喜ばせる姿勢が、人生の半分以上を世界の檜舞台で輝き続けられる理由だ。



ギターを抱えてアンコールを歌うフロレス ©中東生